

小林市教育研究センター

I	研究主題と副題	7-1
II	主題設定理由	7-1
III	研究目標	7-2
IV	研究仮説	7-2
V	研究組織	7-2
VI	研究構想	7-3
VII	研究の実際	7-3
1	研究主題「確かな力」について	7-3
2	「こすもす科」研究班	7-4
(1)	「こすもす科」にかかわる成果や課題	7-4
(2)	児童生徒用テキスト・指導者用手引きの改訂	7-4
(3)	新単元の設定	7-4
(4)	新単元の指導（検証授業）	7-5
ア	小学校第5学年「よい姿勢でII」のホップ・ステップ段階の指導	7-5
イ	中学校第2学年「お弁当作りにチャレンジ」のホップ段階の指導	7-6
(5)	単元配列の見直し	7-7
(6)	単元の学習内容や指導計画等の見直し	7-7
3	学力向上班	7-7
(1)	「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図るための手立て	
ア	小林の「基礎的・基本的な知識・技能」について	7-7
イ	「基礎的・基本的な知識・技能」の系統表の作成	7-8
ウ	系統表の効果的な活用	7-8
(2)	学習意欲・学習習慣に関する意識調査	7-9
ア	調査の目的	7-9
イ	調査の内容	7-9
ウ	調査結果	7-9
VIII	研究の成果と今後の課題	7-10
○	参考文献	
○	研究同人	

I 研究主題と副題

児童生徒の「確かな力」の育成を図る小林ならではの教育活動の創造
～小中一貫教育における「こすもす科」のさらなる充実と確かな学力の定着を通して～

II 主題設定理由

少子高齢化社会の現実的な到来、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等が進む現代において、学校教育では自立した一人の人間として、他者と共生、協同し、知恵をもちより、未来を切り拓く人材の育成が求められている。小学校では本年度から、中学校においては次年度から完全実施される新学習指導要領において、「知」「徳」「体」のバランスのとれた力である「生きる力」をよりいっそう重視して育成していくことが理念として掲げられた。

本県では平成17年度から「宮崎の教育創造プラン」の第1・2期戦略プロジェクトにおいて、「人間力の育成」を目標に、諸政策が推進され、多くの成果を残した。本年度は「第二次宮崎県教育振興基本計画」が策定され、「未来を切り拓く 心豊かでたくましい 宮崎の人づくり」をスローガンとして、今後10年間で目指す本県教育の姿が明確にされ、本県の未来の情勢も見据えた「人づくり」を基本に、より一層の「人間力」育成を推進していくことが期待されている。

小林市においては、「夢と生きがいをもった人を育てるまちづくり」が推進され、学校教育では「夢と元気と勇気ある小林教育」を基本目標として、小林で産まれたものが小林で育ち、小林で生きていく「地産・地育・地生」の教育を目指している。その施策の一つとして、「知」「徳」「体」「食」のバランスのとれた「生きる力」を身に付けた児童生徒の育成に向けて、平成20年度に策定された「小林市小中一貫教育基本計画」のもとに、平成21年度から旧小林地区で、そして平成23年度から野尻町区も含めた全小中学校区での一貫教育が実施されている。

本教育研究センターでは、その小中一貫教育を推進する中で、小林市民に必要とされる基本的な生活習慣や規範意識の向上、郷土愛等の育成を目指して、自分・他者・社会の3領域において自己育成能力、コミュニケーション能力等の8つの能力を育む「こすもす科」を創造した。「こすもす科」の特性としては、「学習内容を確実にできるようにするまで見届ける教育」、「小中学校9年間で系統的に育成していく教育」、そして「小林市内の全小中学校で共通実践する教育」の3つが挙げられる。その特性のもとに2年間の実践を通して、「こすもす科」の指導方法や学習内容等において成果と課題が明確になってきたとともに、旧野尻町との合併を契機として、郷土学習を扱う社会領域の単元の見直し等の改訂の必要性も出てきた。

一方、諸学力調査の結果から学力の向上が本市の課題として挙げられる。特に全国学力・学習状況調査等における「B活用に関する問題」では、全国・県平均と比較すると定着状況に課題が見られる。このような実態を踏まえ、活用する力の土台となる基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着をより一層進めていく必要がある。その基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るための指導を市内全小中学校で進めていくために、「こすもす科」の3つの特性を生かし、その課題を解決していくことができるのではないかと考えた。

そこで、本年度は児童生徒の「確かな力」を育成するために、「こすもす科」のさらなる充実を図るとともに、確かな学力の定着、特に各教科の基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着に焦点化して、研究を進めていく。

「こすもす科」については、新単元の設定、全単元の指導計画等の見直しとともに、児童生徒用テキスト、指導者用手引きの改訂を通して、さらなる充実を図っていく。また、各教科の基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着のための手立てについては、小中学校9年間の各教科の学習内容の系統性を明確にするとともに、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着が図られるシステムを構築していく。

以上のことを通して、児童生徒の「確かな力」を育成する小林ならではの教育活動を創造していくことを目指し、本主題を設定した。

III 研究目標

小林市の児童生徒の実態や教育の現状を踏まえ、小中一貫教育における「こすもす科」のさらなる充実と各教科での確かな学力の定着を通して、児童生徒の「確かな力」の育成を目指した小林ならではの教育活動を創造する。

IV 研究仮説

小林ならではの教育活動の創造に向けて、小中一貫教育で次のような手立てを行えば、「こすもす科」のさらなる充実と各教科での確かな学力の定着につながり、児童生徒の「確かな力」の育成を図ることができるであろう。

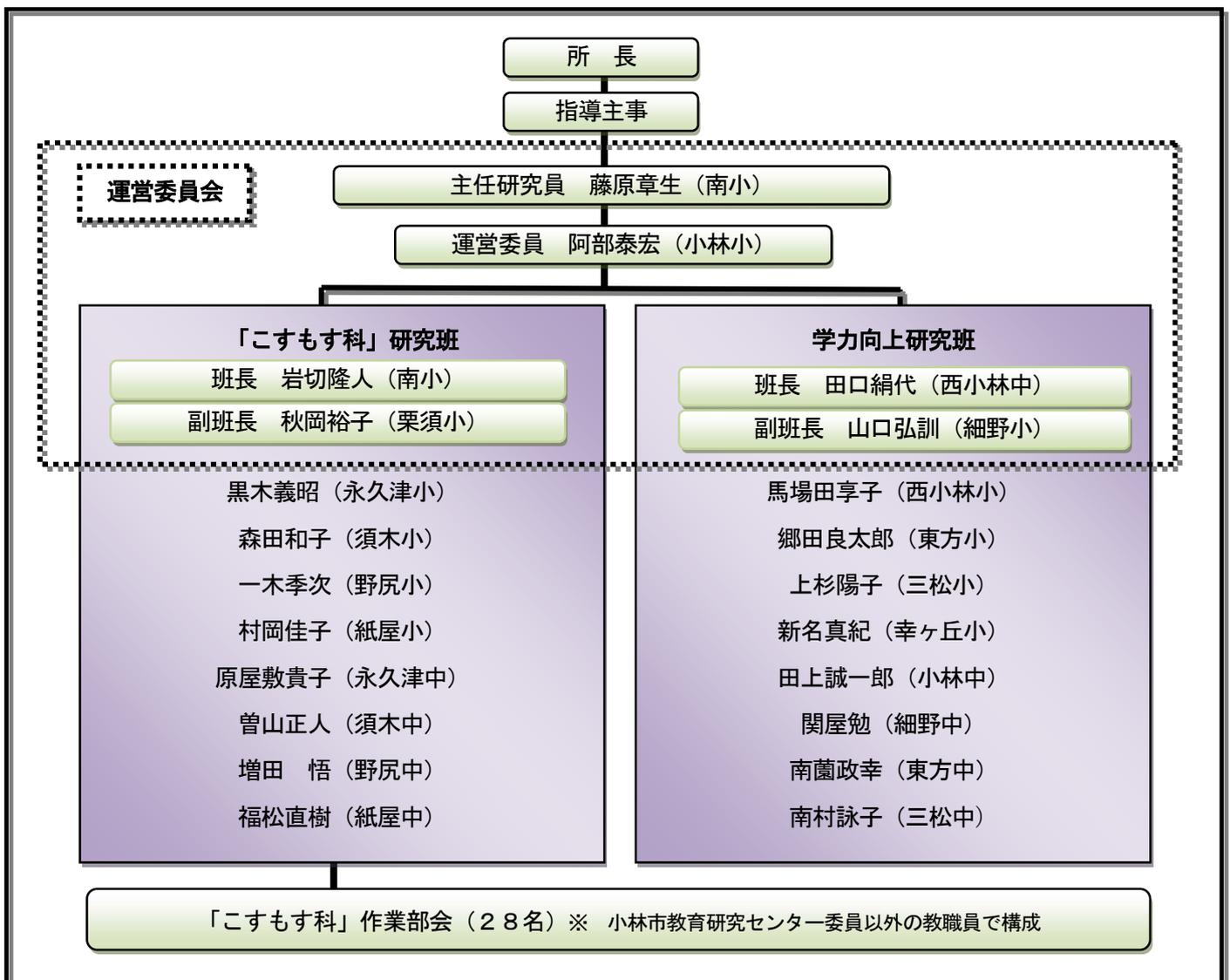
- (1) 「こすもす科」のさらなる充実を図るための児童生徒用テキスト、指導者用手引きの改訂
- (2) 新単元設定も含めた自分・他者・社会領域の学習内容・指導計画等及び単元配列の見直しを図る研究
- (3) 各教科で育成する基礎的・基本的な知識・技能の系統性を明確にし、確実な定着を図る手立ての研究

V 研究組織

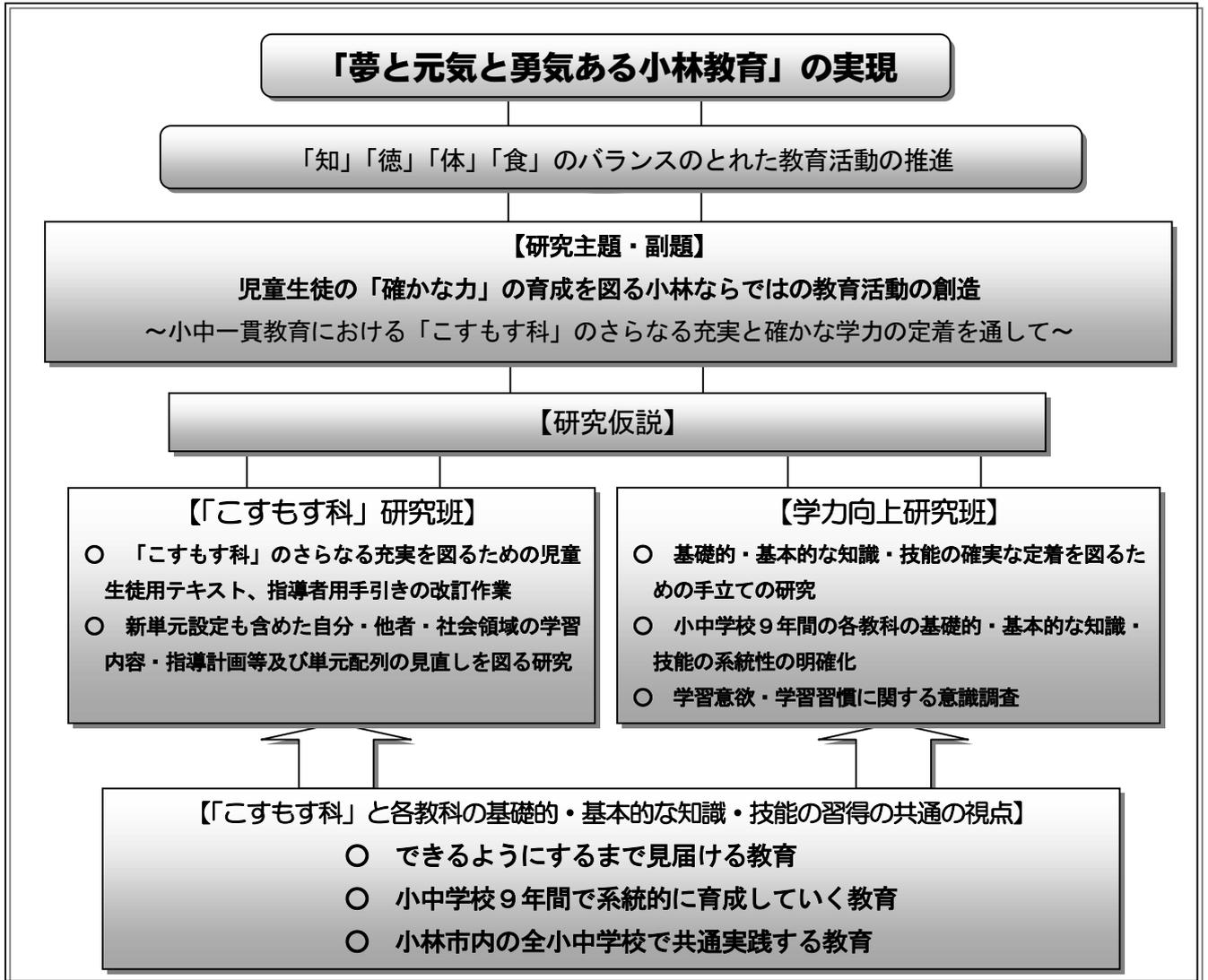
研究班を次の2つの班で構成した。

- 「こすもす科」のさらなる指導の充実を図るための「こすもす科」研究班
- 確かな学力を定着させるための手立てを研究する学力向上研究班

また、各班のつながりを考慮し、指導主事、主任研究員、運営委員、班長、副班長による運営委員会を設置し、研究の調整を図ることとした。



VI 研究構想



VII 研究の実際

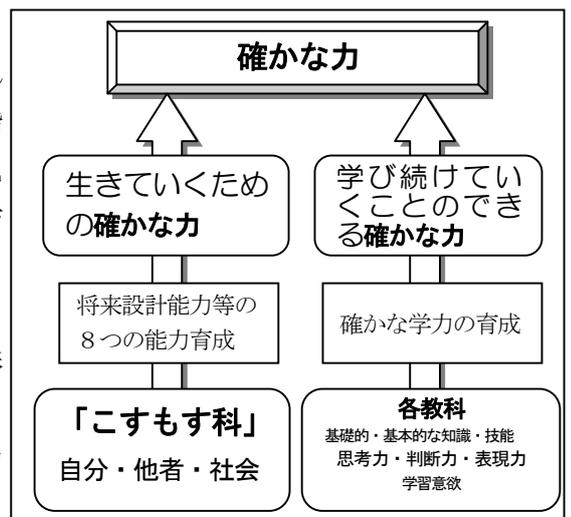
1 研究主題「確かな力」について

「こすもす科」は、全単元の指導計画等の改訂を通して、「こすもす科」のさらなる充実が図られることが今後期待される。具体的には単元内容の見直し、基本的な考え方を受けた指導過程の改善により、「こすもす科」のねらいとしている自己の主体性・自律性、自己と他者、個人と社会との関係形成を育み小林市民として必要な人間力を培うことができると考える。つまり、「こすもす科」のさらなる充実を図っていくことは、自立した一人の人間として「生きていくための確かな力」が形成されていくと考える。

また「確かな学力」を構成する要素は「学習意欲」「思考力・判断力・表現力」「基礎的・基本的な知識・技能」である。

その中でも学年及び以後の学習段階の学びの土台となる「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着が図られてこそ、「思考力・判断力・表現力」等が育成されていくとともに、自ら「学び続けていくことのできる確かな力」へとつながっていくと考える。

よって、本研究センターでは、「確かな力」を「生きていくための確かな力」「学び続けていくことのできる確かな力」を合わせた力として、本年度の研究を進めていくこととする。



【本研究における「確かな力」の構想図】

2 「こすもす科」研究班

「こすもす科」研究班では、これまで2年間の「こすもす科」の実践で明らかになった成果を継承し、課題を改善するとともに、指導の効果をさらに高め、「こすもす科」のさらなる充実を図るために、「児童生徒用テキスト」「指導者用手引き」の改訂に取り組むこととした。改訂内容として「新単元の設定」や「単元配列の見直し」、旧野尻町との合併に対応した「単元の学習内容や指導計画等の見直し」を行った。

(1) 「こすもす科」にかかわる成果や課題

これまで2年間の実践で明らかになった成果や課題を以下のように整理した。

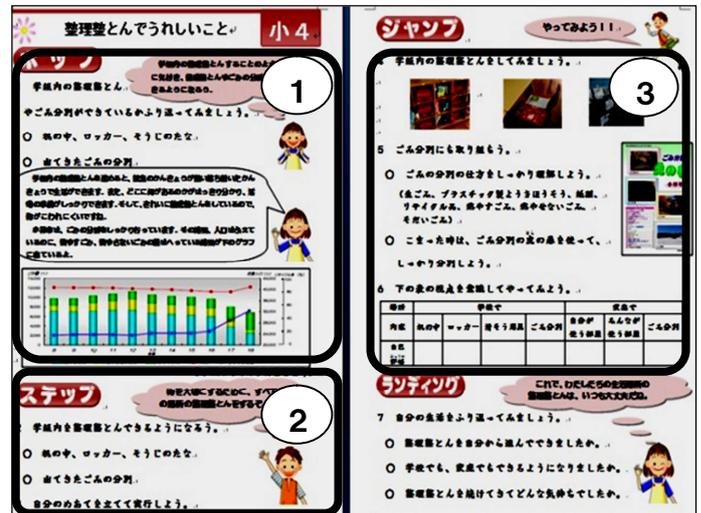
項目	内 容
これまでの実践上の成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小林市内全小中学校で、小林市民として必要な資質向上に向けて、「こすもす科」が実践されている。 ○ 自分・他者領域の基本的な学習スタイルが構築され、各領域・各段階の指導の力点が明確になった。社会領域の学習意欲が継続できるような指導計画へ見直す。 ○ 評価規準の意味をもつ各単元の「めざす児童生徒像」が設定された。
これまでの実践上の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 情報量の多い児童生徒用テキストに改善する必要がある。 ○ 指導者用手引き内の自分・他者領域の指導計画を基本的な学習の流れでそろえる必要がある。 ○ 社会領域においては、児童生徒の学習意欲が継続できるような指導計画へ改善する必要がある。 ○ 学年の発達の段階に応じた単元配列に見直す必要がある。
小林市の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小林市では「立腰指導」「弁当の日」を重視している。そこで、これまでの学校独自の取組を生かし、小中学校9年間の系統性を考えた内容にする必要がある。 ○ 旧野尻町との合併に伴い、旧野尻町も考慮した学習内容に見直す必要がある。(社会領域：郷土小林を扱う内容)

以上のことを改訂の視点とした。

(2) 児童生徒用テキスト・指導者用手引きの改訂

自分・他者領域の児童生徒用テキストについては、(1)の「これまでの実践上の成果及び課題」を生かし、これらの領域の学習スタイルに応じて、資料1のように、①指導内容の必要性やよさを気付かせる内容、②スキルトレーニングを支える内容、③日常実践を促す内容等を充実させることで、資料1のような活用しやすいテキストに改訂した。

また、指導者用手引きについてもテキストに準じて、改訂を行った。



【資料1 児童生徒用テキスト例】

(3) 新単元の設定

(1)にある「小林市の課題」から、「立腰指導」「弁当の日」にかかわる内容について、新単元として設定することにした。「こすもす科」で取り上げることにより、市内統一して同じ目的で小中学校9年間の系統性を考えた指導ができると考えた。また、この2つの新単元は、自分領域のねらいである「基本的な生活習慣を身に付け、自立的な判断と自主・自律に基づいた行動をとること」に迫るために、自分領域に位置付けることとした。

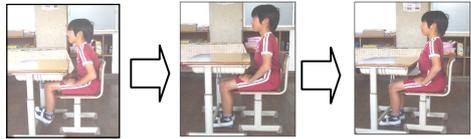
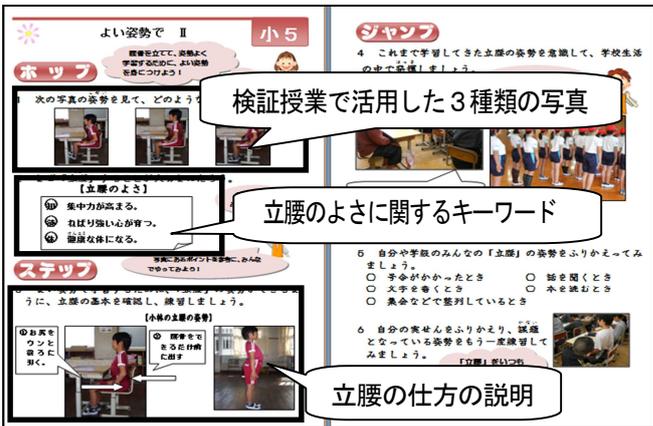
そこで、「立腰指導」については、学校生活上のしつけや児童生徒の発達の段階、単元の系統性を考慮して小学校第1・2・5学年、中学校第2学年の単元として設定した。「弁当の日」については、家庭科の学習内容との関連や小中学校9年間の系統性を考えて小学校第5学年、中学校第2学年の単元として設定した。

学年の指導における系統性は以下の通りである。

項目	小学校第1学年	小学校第2学年	小学校第5学年	中学校第2学年
立腰指導：単元名	よいしせいともちかた	よいしせいでI	よい姿勢でII	よい姿勢でIII
指導の系統	正しい姿勢で座ること	座った状態	座った、立った状態	座った、立った、正座した状態
弁当の日：単元名			お弁当作りにトライ	お弁当作りにチャレンジ
指導の系統			食への関心 作る喜び 食への感謝の気持ち	「弁当の日」の意義の理解 「弁当の日」への実践意欲と態度

(4) 新単元の指導 (検証授業)

ア 小学校第5学年「よい姿勢でII」のホップ・ステップ段階の指導

段階	主な学習内容	授業の実際
ホップ ステップ 1時間	① アンケート結果をもとに学習内容に気付く。 ○ 事前に調査した結果	① 導入ではアンケート結果をもとに立腰の課題に気付かせるようにした。  ② 授業中、話を聞くときに腰骨を立てていますか。 よくできている 3人 10% だいたいできている 14人 49% あまりできていない 10人 34% できていない 2人 7% ③ 授業中、文字を書くときに腰骨を立てていますか。 よくできている 2人 7% だいたいできている 19人 66% あまりできていない 5人 17% できていない 3人 10%
	② 立腰のよさや必要性を考える。 【小林市で考える立腰のよさ】 ③ 集中力が高まる。 ④ ねばり強い心が育つ。 ⑤ 健康な体になる。	② 立腰のよさや必要性に気付かせるために、写真提示を行い、児童の考えを吸い上げながら、指導者の方で「やる気」「集中」「粘り強さ」「健康」の視点で押さえた。 
	③ 立腰のポイントを知り、自分の姿勢を振り返る。	③ 立腰のポイントの理解を図るために、3種類の写真を示したり、指導者が実演したりした。 
	④ コース別スキルトレーニングを行う。 ○ 文字を書くとき ○ 話を聞くとき ○ 立っているとき ⑤ 実践カードを作成する。	④ コース別のスキルトレーニングでは3つのコースを設定して取り組んだ。  
ジャンプ 0時間	① 実践の自己評価 ② 友達のよさの称賛	検証授業の成果を児童生徒用テキストへ活用
ランディング 1時間	① ジャンプ段階を振り返る。 ② 課題に対する改善方法を考える。 ③ 課題に応じたスキルトレーニングを行う。 ④ 学習のまとめを行う。	 検証授業で活用した3種類の写真 立腰のよさに関するキーワード 立腰の仕方の説明

イ 中学校第2学年「お弁当作りにチャレンジ」のホップ段階の指導

段階	主な学習内容	授業の実際
ホップ 1時間	① これまでの「弁当の日」の取組を想起し、「弁当の日」の意義を考える。	① 「弁当の日」の意義を考えさせ、生徒の「自立のため」等の考えを生かして指導者の方で意義を押さえた。
	「弁当の日」の意義 ○ 自ら考え、自ら判断し、自ら表現する力 ○ 食に関する「管理する力」・「選択する力」・「調理する力」などの実践力 ○ 生産者への感謝、地場産物、食文化に対して関心をもつ力	⇒ 小林市の「弁当の日」の意義 ○ 考える力 ○ 作る喜び ○ 感謝の心
	② 「弁当の日」への取組状況を振り返る。 ○ ワークシートの活用	② 「弁当の日」の取組状況については、かかわり、栄養のバランス、量、技能、時間の5つの視点で振り返らせ自分の課題に気付かせるようにした。また、アンケート結果を示し、学級の傾向をつかませた。
	③ 6つの基礎食品群や主食、主菜、副菜のバランスのよい割合について復習する。	③ 6つの基礎食品群や主食、主菜、副菜のバランスのよい割合については、家庭科の学習内容を生かして理解を深めた。
	④ 各班で理想とする弁当を考える。	④ 班で理想とする弁当を考える際に、カロリーや作り方が載っている「料理カード」を活用することにより、生徒は栄養のバランスやカロリー等を考えながらメニューを決めた。
⑤ 調理計画を立てる。	⑤ 決まったメニューをもとに担当者を決めていき、班で調理実習を行うことを伝えた。	
ステップ 2時間	① 各班で考えた弁当を調理する。 ② 「弁当の日」の個人の計画を立てる。	検証授業の成果を児童生徒用テキストへ
ジャンプ 0時間	① 調理計画をもとに、「弁当の日」の実践を行う。	
ランディング 1時間	① 「弁当の日」の取組について振り返る。 ② 課題については、改善策を考える。	
生徒の課題を改善するために、調理実習については1人2品つくることを通して、「かかわり」「栄養のバランス」「量」「技能」「時間」などの課題を改善する指導計画へ変更した。		

5) 単元配列の見直し

単元配列の見直しでは、これまでの実践上の課題や新単元の設定を受けて、単元指導の時数、学習内容の充実、児童生徒の発達の段階を考慮して、資料2のように改善を図った。

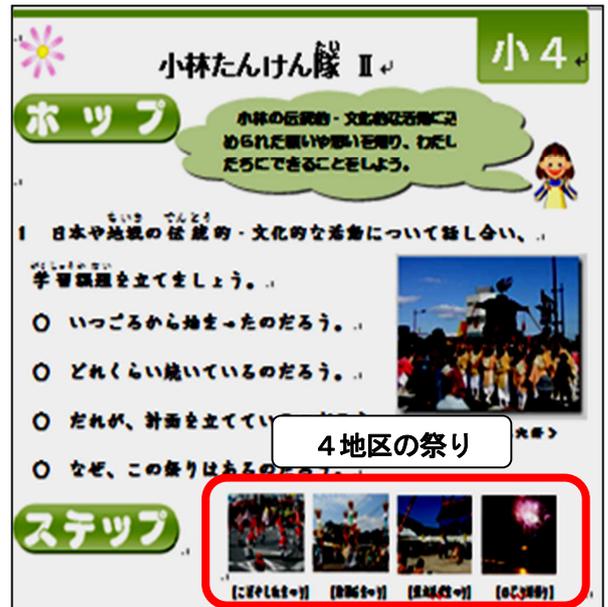
領域	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
自分		ものをさいごまで使おう		お金の使い方		物の貸し借り	中2から中3へ		社会とお金
		よいしせいでI			よい姿勢でII	新設の単元		よい姿勢でIII	
社会		単元の指導時数変更			私は保育士	ライフプラン	自分と夢	夢を探そう	夢に向かって

【資料2 単元一覧表の一部】

6) 単元の学習内容や指導計画等の見直し

社会領域「小林たんけん隊Ⅰ・Ⅱ」では、旧野尻町との合併に伴う対応として、単元の目標は変えずに、学習内容を考慮していくことにした。小学校第3学年「小林たんけん隊Ⅰ」では、ホテルを調べる学習を通して、身近な地域から市全体を考える学習内容となるように見直した。小学校第4学年「小林たんけん隊Ⅱ」では、学習内容を小林校区は小林秋祭りを、東方校区は陰陽石祭りを、須木校区はほげまつりを、野尻校区は野尻湖まつりを取り上げ、内容選択学習の形式をとることにした。

この考えを受けて、テキストには各校区の祭りを写真で紹介し、調べる方法を示していくことにした。



【資料3 小林たんけん隊Ⅱテキスト】

3 学力向上研究班

学力向上研究班では、確かな学力の定着を目指して本年度より3年計画で研究を進めていく。その中でも本年度は「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図るための手立ての在り方について検討していった。

本年度取り組んだ内容は、次の通りである。

- 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図るための手立て
- 学習意欲・学習習慣に関する意識調査

(1) 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図るための手立て

確かな学力の向上を図るためには、まず基礎的・基本的な知識・技能を児童生徒がしっかりと身に付けることが大切である。また、それぞれの学年だけでなく小中学校9年間を見通した確かな学力の定着を図っていく手立ての必要がある。

本研究センターでは、「こすもす科」の特性を生かした各教科の基礎的・基本的な知識・技能の習得のための視点を明確にした。

- 【「こすもす科」の特性を生かした各教科の基礎的・基本的な知識・技能の習得のための視点】
- できるようにするまで見届ける教育
 - 小中学校9年間で系統的に育成していく教育
 - 小林市内の全小中学校で共通実践する教育

ア 小林の「基礎的・基本的な知識・技能」について

「こすもす科」の特性を生かした各教科の基礎的・基本的な知識・技能の習得のための視点を踏まえ、

「小林の子どもたちの基礎的・基本的な知識・技能」を定義することにした。小林市内全ての小中学校で系統的に実施していくこと、また、市内教職員の共通理解・共通実践を図っていくことを目指し、次のように「基礎的・基本的な知識・技能」を定義した。

- 【小林の基礎的・基本的な知識・技能】**
- 当該単元において確実に習得していなければ、当該学年の学習内容の習得が困難である知識・技能
 - 当該学年において確実に習得していなければ、以後の学年の学習内容の習得が困難である知識・技能

イ 「基礎的・基本的な知識・技能」の系統表の作成

小林の基礎的・基本的な知識・技能の定義を受け、その習得のために「小中学校9年間で系統的に育成する」という視点に着目すると、小中学校9年間で習得させるべき基礎的・基本的な知識・技能の内容を明確にする必要がある。

そこで、本研究センターでは、小林の基礎的・基本的な知識・技能の定義をさらに焦点化し、「読み・書き・計算」の定着が確かな学力の根幹になるととらえて、本年度は、算数・数学科の「数と計算」「数と式」、国語科の「言語事項」領域について系統表を作成することにした。

① 当該指導単元の内容及び関連する練習問題等

② 当該学習内容の習得が十分でない場合
当該学年の以前の学年の関連する学習内容を示すとともに、eライブラリ、Web単元学習評価システム等を活用した復習問題を載せている。

③ 当該指導単元の学習内容の以後の単元及び中学校との関連
以後の見通しをもって指導することができる。

【資料4 「基礎的・基本的な知識・技能」の系統表】

ウ 系統表の効果的な活用

基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着のためには、「小林市内の全小中学校で共通実践」ができなければいけない。また、活用が図られ、「できるようにするまで見届ける教育」を実施するために、本年度作成した、系統表を次年度以降どのように効果的に活用していくかについて方向性を検討した。

【本年度】	算数・数学科「数と計算」「数と式」、国語科「言語事項」の系統表の作成 小中学校9年間で系統的に指導
【来年度】	市内イントラネットを活用した系統表のシステムづくり (パソコンで系統表を確認して、問題等をプリントアウト) 「できるまで見届ける」教育の実施
【来年度以降】	系統表の問題を活用した確認テストの作成及び実施、結果分析 小林市内の全小中学校で共通実践

(2) 学習意欲・学習習慣に関する意識調査

ア 調査の目的

今年度は、研究の初年度であることから、小林市内の全ての児童生徒、教職員及び保護者に対して意識調査を実施した。意識調査の目的は、以下の通りである。

- 児童生徒に、確かな学力を身に付けさせるために必要な力を調査・分析する。
- 教職員、保護者が、児童生徒に身に付けさせたいと考えている力を調査・分析する。
- 児童生徒、教職員、保護者の学習意欲・学習習慣等に関する意識の共通点や相違点を把握し分析する。
- 意識調査の実施を通して、教職員や保護者に対して学習に関する啓発活動を行う。

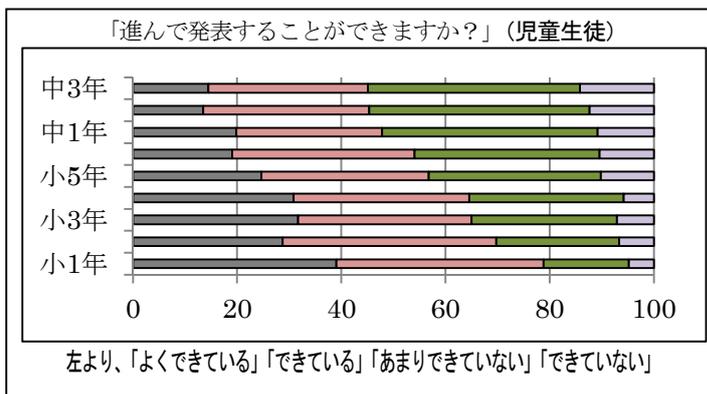
なお、意識調査への結果は今後の研究内容に反映させ、再度調査を実施することで研究の成果の検証に活用する。

イ 調査の内容

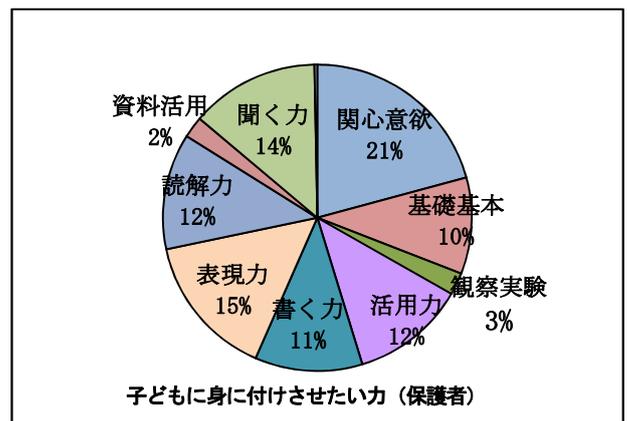
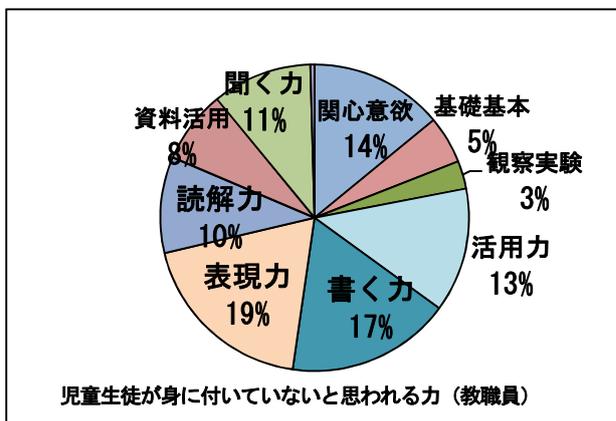
調査項目については、宮城県小中学校学力向上検証改善委員会が提唱した『こんな子どもは学力が伸びている！学力向上10のポイント』を参考にしながら検討を重ね、主に以下のような内容で調査を実施した。

児童生徒	○ 学校での学習への意欲・関心について ○ 読み・書き・計算への意欲・関心について ○ 家庭学習について 等
教職員	○ 児童生徒に求める力について ○ 家庭学習について ○ 国語科、算数・数学科で身に付けてほしいことについて 等
保護者	○ 子どもに求める力について ○ 家庭学習への関わりについて ○ 宿題の量について 等

ウ 調査結果（一部抜粋）



- 【児童生徒の傾向】
- 発表については、学年が上がるにつれて積極性がなくなってきている。
 - 家庭学習の定着については、児童生徒の意識では、必要とされる時間の学習をしていると回答した割合が高かった。しかし、保護者、教職員との意識の差があるようである。
 - 自分の考えや感じたことを書く活動や算数・数学の問題の解決方法を説明する活動には苦手意識をもつ割合が高い。



- 【保護者及び教職員の傾向】
- 教職員は、児童生徒に表現力や自らの考えを書く力、進んで学ぶ力、知識・技能を活用する力が十分に習得されていないと考えている。
 - 保護者は、子どもに対して進んで学ぼうとする力、聞く力、自分の考えを述べる力、読解力、知識・技能を活用する力を求めていると考えられる。

これまで学校単位での調査等は実施されてきたが、小林市内全小中学校の児童生徒、保護者、教職員を対象とした調査はなされていなかったため、この意識調査の結果から、保護者及び教職員が児童生徒に身に付けさせたいと考える力が明確になるとともに、児童生徒の学習意欲や学習習慣の傾向、さらに家庭学習の状況等も把握することができた。

次年度以降さらに分析を進め、課題とされる事項についても本研究センターで対策を練り、小林市内の全小中学校で系統的に、共通実践をしていきたいと考える。

Ⅷ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 「こすもす科」研究班

ア 「こすもす科」の改訂作業として、全ての単元の指導過程を統一したことで、「こすもす科」のそれぞれの領域及び単元のねらいを達成するための土壌ができた。

イ 「こすもす科」の改訂作業において、「立腰指導」及び「弁当の日」について、理論構築のもとに、検証授業を実施し、小林市の実態に即したよりよい新単元を設定することができた。

(2) 学力向上研究班

ア 各教科における「基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着」を小林市内全小中学校で共通して取り組むために、「小林の基礎的・基本的な知識・技能」を定義し、それに基づいた国語科、算数・数学科の系統表を作成し、その活用に向けたシステムの土台を構築することができた。

イ 学力向上に対する共通の認識及び課題点を明確にするために小林市の全ての児童生徒、保護者、教職員に対する学習意欲・学習習慣の意識調査を実施し、その実態を小林市全体で把握することができた。

2 今後の課題

(1) 「こすもす科」研究班

ア 改訂された「こすもす科」の児童生徒用テキスト、指導者用手引きを活用し、市内全教職員と共通理解を図り、「こすもす科」の指導の充実のために、今後、実践を深めていく必要がある。

(2) 学力向上研究班

ア 基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けて、本年度の国語科及び算数・数学科の系統性及びシステムづくりを生かして、次年度以降、社会科、理科、英語科についても研究を進めていく。また、「思考力・判断力・表現力」「学習意欲」についても関連させて研究を進めていく必要がある。

イ 児童生徒、保護者、教職員への学習意欲・学習習慣に関する意識調査結果から、課題となる事項について、改善を図っていく手立てを研究していく必要がある。

○ 参考文献

- ・『小学校学習指導要領』株式会社東洋館出版社
- ・『中学校学習指導要領』株式会社東洋館出版社
- ・『小中一貫教育基本計画』小林市教育委員会
- ・『第二次宮崎県教育振興基本計画』宮崎県教育委員会

○ 研究同人

所 長	佐藤 勝美 (小林市教育委員会教育長)	
主任指導主事	東 宏太郎(小林市教育委員会学校教育課教育指導監)	研 究 員 上杉 陽子(小林市立三松小学校 教諭)
指導主事	盛満 政仁(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	研 究 員 新名 真紀(小林市立幸ヶ丘小学校 教諭)
指導主事	畑 中 勉(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	研 究 員 森田 和子(小林市立須木小学校 教諭)
主 事	永野 真吾(小林市教育委員会学校教育課主事)	研 究 員 一木 季次(小林市立野尻小学校 教諭)
主任研究員	藤原 章生(小林市立南小学校 教頭)	研 究 員 村岡 佳子(小林市立紙屋小学校 教諭)
運営委員	阿部 泰宏(小林市立小林小学校 教諭)	研 究 員 田上誠一郎(小林市立小林中学校 教諭)
班長(こす)	岩切 隆人(小林市立南小学校 教諭)	研 究 員 関 屋 勉(小林市立細野中学校 教諭)
副班長(こす)	秋岡 裕子(小林市立栗須小学校 教諭)	研 究 員 原屋敷貴子(小林市立永久津中学校 教諭)
班長(学力)	田口 絹代(小林市立西小林中学校 教諭)	研 究 員 南 蘭 政幸(小林市立東方中学校 教諭)
副班長(学力)	山口 弘訓(小林市立細野小学校 教諭)	研 究 員 南村 詠子(小林市立三松中学校 教諭)
研 究 員	馬場田享子(小林市立西小林小学校 教諭)	研 究 員 曾山 正人(小林市立須木中学校 教諭)
研 究 員	郷田良太郎(小林市立東方中学校 教諭)	研 究 員 増 田 悟(小林市立野尻中学校 教諭)
研 究 員	黒木 義昭(小林市立永久津小学校 教諭)	研 究 員 福松 直樹(小林市立紙屋中学校 教諭)